花の咲く前

小川未明

青空文庫

一

赤い牛乳屋の車が、ガラ、ガラと家の前を走っていきました。幸吉は、春の日の光を浴びた、その鮮やかな赤い色が、いま塗りたてたばかりのような気がしました。それから、もう一つ気のついたことは、この車がいってしまってからまもなく、カチ、カチという拍子木の音がきこえたことです。昨日もそうであったし、一昨日もそうであったような気がするのです。

「不思議だなあ、牛乳屋の車と、紙芝居のおじさんと、どうして、いつもいっしょにくるのだろうな。」と、ブリキ屋の店から、外を見ていた幸吉は、思ったのでした。

紙芝居は、今日も、赤トラのつづきをやるにきまっています。赤トラの話は、なかなか長編なんでした。おじさんはじめ、子供たちは、みんな赤トラを悪いねこだといっていましたけれど、幸吉は、心の中で赤トラに同情していました。なぜなら、もとをいえば人間が悪いからです。三びきの子を産むと、一ぴきは、近所の子供が追いかけて、どぶの中へ落としたし、一ぴきは、だれかが連れていってしまったし、もう一ぴきは、車に足をひかれたので、母ねこは、そのたびに悲しんで気が狂いそうになり、ついに仕返しをしようと決心するようになりました。赤トラは人の家へ入り込んで、はじめのうちは、金魚をとったり、カナリヤを食べたり、お膳についているお魚をさらったりしたくらいのものですが、だんだんいたずらが募って、赤

ん坊をひっかいたり、お嬢さんの手提を失くしたり、取り返しのつかないことをするようになりました。しまいには、「赤トラ」と、きくと、みんなが震えあがるようになりました。

中には、槍や、鉄砲を用意しておいて、きたら退治してやろうと待ちかまえているものもありましたが、神通力を得ました赤トラは、なかなか人間の目には入りませんでした。

いつ忍び込んできて、いつそんないたずらをするかわからないので、まったく悪魔のしわざとしか思われなくなりました。町の人たちは、夜になると心配でろくろく安眠はできなかったのです。

ここにK技師という、若い発明家があって、赤トラの話をきくと、たいそう腹を立てました。「世間を騒がせる悪いねこだ。いかほどの神通力があるにせよ、科学の力にはかなうまい。私が退治してやろう。」と、電気を応用して、いよいよ、赤トラと勝負を決することになったのです。

ここまでは、幸吉が見た、話のあらましでありました。

「きょうは、どうなるだろうか？」

彼は家にじっとしていられませんでした。ちょうど叔父さんが、店にいなかったので、幸吉は、酒屋の前の空き地の方へ走っていきました。

二

子供たちは、空き地に積んである砂利の上へ登ったり、空き箱の上にすわったりして、紙芝居のおじさんを取り巻いていました。自転車の上の小さな箱の舞台の中には、見覚えのある赤トラの絵が出ていました。七、八人も子供があめを買わなければ、おじさんは、説明をはじめないのが常でありました。

「まだはじめないかなあ。」と、待ちくたびれて、いっている子供もありました。

自転車に乗って、そばを通りかけた小僧が、わざわざ自転車を止めて、子供たちの中にまじって、おじさんの説明をきこうとしているのも見受けられます。

茶色の古びた帽子を斜めにかぶった、口ひげのあるおじさんは、なんとなくずるそうな目つきをして、自分のまわりに立っている子供たちの顔を見まわしました。そして、心の中で、いつもくる子供たちがみんな集まったかと、一人一人の顔をしらべているようにも見られました。おじさんは、いつも買ってくれる子供の顔は、よく覚えているのでしょう。そして、その中に幸吉が立っていると、おじさんの、そのずるそうな目つきは幸吉の顔の上に止まりました。おじさんは、幸吉にさも皮肉そうに、

「おまえ、このごろ買わないな。」といいました。幸吉が、いつも汚らしいふうをしていたからでもありましょう。また、めったにあめを買わないので、紙芝居のおじさんにとって、けっしていい得意でなかったのも事実です。

しかし、幸吉は、みんなの前で、こんなことをいわれていい気持ちはしませんでした。彼は、だまって、ただ顔を真っ赤にしているには、もっと勇気がありました。また、そんなことをいわれる理由もないように感じました。彼は、おじさんに向かって、

「買いたくないから、買わないのだよ。」と、きっぱりといいました。彼は、すくなくも侮辱に対する仕返しをしたように、小さな肩をぐっと上げたのです。

「ふん。」と、おじさんは、いったきりで、あっちを向いてしまいました。

「そんなこと、どうでもいいから、早くおはじめよ。」と、一人の子供が叫びました。

「もうすこし待ちな、いまはじめるから。」と、おじさんは、お客の気を損じまいとしました。

幸吉は、いつまでも立っていてお話をきこうとはしませんでした。独り、みんなからはなれて、あちらへ歩いていきました。彼の心の中は、なんとなくさびしかったのです。

黒い常磐木の林があった、その下へきました。じきに花の咲く季節だったけれど、ここだけは、まだ冬が残っているように風が冷たかったのです。彼は、この冷たい風が、かえって、哀しい自分の胸にしみるように、いつまでもここにいて、風に吹かれていたい気持ちがしました。足音がしたので振り向くと、こちらへ駆けてくる女の子の赤いたもとが見えました。

「幸吉さん、早くいらっしゃいよ。私お金を持っているわ。」と、日ごろから親しいみつ子さんが、いいました。みつ子のお父さんは、大きな会社に勤めているとかで、みつ子は、いつも幸福そうでした。けれど、幸吉には、そのことが、なんの関係もなかったのです。

「みつ子さんが、きけばいいじゃないか。」と、幸吉は、白い目で、みつ子の顔を見ました。
「あんたもいらっしゃいよ。」
みつ子は、独りはなれていった幸吉を心の中で気の毒に思ったので、追いかけてきたのです。
あちらでは、おじさんのおもしろそうに声色を使っているのが、きかれました。
「僕、きかなくていいんだよ。」
幸吉は、このうえ、自分を連れていこうとするのは、自分を降伏させるものだと思ったので、つい怒り声を出したが、しまいにそこにいたたまらなくなって、またあてもなく駆け出していきました。

三

幸吉が店へ帰ると、仕事場に立っていた叔父さんは、さも手柄顔をして、
「ジャックの奴、うまく物置へ入れて閉めてしまった。いまに犬殺しがきたら引き渡してくれるのだ。」といいました。幸吉は、これをきくと、どきっとしました。なにか真っ黒な手で胸を押さえつけられたような気味悪さを感じました。「赤トラ」の話に強く心を惹かれたのも、このジャックという年老いた不幸の野犬のことが、たえず頭の中にあったからでした。叔父は、どういうものかジャックを心から憎んでいるのでした。それにはたいした理由があるのでなく、

ただこの哀れな黒い毛の汚れた老犬を見ると、むらむらと憎くなるというふうでした。幸吉は、それを怖ろしいことのように思いました。幸吉は、あるときには、たまりかねて、叔父さんの顔を見上げながら、

「叔父さん、ジャックをかわいがっておやりよ。かわいそうじゃないか。」といいました。

「どういうものか、あいつはきらいでな。ひどいめにあわせてくれなけりゃ。」と、叔父は、金づちを手に握って、きたら投げつける身構えをしていました。

「なにも悪いことをしないじゃないか。」と、幸吉は、つくづく叔父さんの顔を見て、どうしてこの哀れな犬だけに無情なことをするのだろう、ほかの犬には、やさしくしてやるのにと思ったのでした。

「あいつが、植木鉢に小便をかけたし、いつかくつが片方失くなったのも、きっとあいつがどこかへくわえていったのだ。」と、叔父は、答えたが、なんの理由もつけずにいじめるのは、自分でも気がとがめるからだと、幸吉には、思われました。

しかし、いまはそんなときでない。ジャックが物置の中に入れられて、戸を閉められたときいては、じっとしてはいられなかったのです。

「なんで物置の中へ入ったのだろうな。」と、幸吉は、あの年を取っていてもりこうで、敏捷な犬がと不思議に思いました。

「犬殺しに追われてきたんだ。逃げ場がないので、物置の中へ隠れたのだよ。」と、叔父は、

ところもあろうに、おれの家の物置の中へ隠れたのが、あいつの運の尽きだったと、せせら笑いをしていました。幸吉は、またかわいそうに、自分が平常ジャックをかわいがってやるものだから、助けてくれると思って、家の物置にきて隠れたのだ。もし、このまま犬殺しに引き渡してしまったら、ジャックはどんなに自分をうらむかしれない。よし、助けてやろうと、決心しました。

あちらで、しきりに犬の遠ぼえをする声がしていました。犬殺しが近づいてきたのを警戒して、仲間に知らせているのです。幸吉は、すぐに裏手へまわりました。彼の足音をききつけると、暗い物置の中から、訴えるように、すすりなく犬の悲鳴がしました。

「ジャック！　早く遠くへ逃げろ。」

幸吉が、戸を開けると、黒犬は、弾丸のように飛び出して、叔父さんが、仕事をしている店先のブリキ板を蹴散らして、路次を抜けて原っぱの方へ逃げていったのです。

「ばかやろう、なんで犬を出したのだ！」と、叔父さんは、幸吉の頭をなぐろうとしました。幸吉は、手の下をくぐって、自分も犬の後を追って逃げたのであります。

しかし、ジャックの姿は、どこにも見えませんでした。彼は、町を離れたさびしい原っぱの中に立って、口笛を鳴らしました。どこへいってしまったか、ジャックはやってきませんでした。

いつも、こうして口笛を吹けば、遠くからききつけて、駆けてきたものです。彼は、家無し

のジャックを思うと、心の中が悲しかったのでした。

幸吉は、しばらく茫然として、考えながら立っていました。あちらに見える高い煙突は、町のお湯屋か、それとも工場の煙突らしく、黒い煙が早春の乳色の空へ、へびのようにうねりながら上がっていました。

「あ、田舎の家へ帰りたいな。」

幸吉は、自分には、帰る家があるのだと思いました。そう思うと、しみじみと故郷の村が恋しくなりました。

四

ジャックは、森の中へ深く入ってゆきました。彼の後からは、びっこの白犬と、耳の垂れた斑犬がついていきました。そして、たがいにジャックの右になり、左になりして、ジャックの身を護衛するように注意深く先方を見つめていました。すぎや、松の木のしげった森の中にはところどころ日の光が、にじのごとく洩れて下のささの葉を明るく照らしています。ここまでは彼を追ってくるものがありません。野犬の一群は、ジャックを中心にして、自分たちの生活を営むことにしました。彼らは、どこへいくにも一塊となって、いつでも敵に当たる用意をしていました。犬たちの間にも、戦って弱いものは、強いものに絶対に服従するという

おきてがあって、夜になると、どこかの飼い犬が、畜犬票をチャラチャラと鳴らしながら、牛の骨や、パンくずなどをくわえて、彼らの機嫌を取るべく森の中へ持ち運ぶのもありました。

ある日、幸吉は、ジャックのことを思い出しました。

「ジャックは、どうしたろうか。」

往来へ出ると、紫色の美しい着物をきたみつ子が遊んでいました。日の光の中に、ぱっと花が咲いたように、道の上までがまぶしかったのです。

「みつ子さん、赤トラはどうなった?」

幸吉は、このごろ、カチカチという拍子木の音をきいても、いくことがなかったのです。

「とうとうK技師に、電気で殺されちゃったのよ。」

「かわいそうだね。」

「だって、赤ん坊をひっかいたり、人間にかみついたりするんですもの、しかたがないわ。」

「どこかへゆくの?」

幸吉は、みつ子にたずねました。

「叔母さんがいらして、お母さんと三人でお買い物にいくの。幸吉さんにお土産を買ってきてあげるわね。」と、みつ子は、ぱっちりとした黒い目で幸吉を見ました。

「みつ子さん、もう僕、晩にいないかもしれない。」と、幸吉は、じっとみつ子の顔を見返すと、みつ子も、ちょっと驚いた顔つきをしたが、すぐにいきいきと笑って、

「そんなことうそよ、だましたって知っているわ。」と、くるりと彼方を向いて、駆け出していきました。げたについている鈴の音が、リンリンと幸吉の耳にきこえました。

軽気球の上がっているであろう、遠い町の空はかすんでいました。こうして耳をすますと、大海原の波音のように、あるいは、かすかな子守唄のように、都会のうめきが、穏やかな真昼の空気を伝ってくるのです。幸吉は、原っぱへいったが、原っぱには、だれも遊んでいませんでした。丘の木立は、みんなうす紅く色づいていました。あちらの高い煙突からは、今日も黒い煙が上っていました。幸吉は、その煙を見て、明日も、明後日もまたこのように立ち上ることであろうと思ったのです。

まだ霜で枯れたままになっている、草株の上へ腰を下ろすと、黄色な小さいちょうが、風に吹かれて目の前を飛んでいきました。幸吉は、年ちゃんや、正ちゃんたちと、ボールを投げて遊んだ去年の秋の日のことを思い出していました。

このとき、突然後方から、飛びついて幸吉の頭を抱えたものがあります。

「あっ、ジャックだ！」

彼は、びっくりしたよりは、踊り上がったほど喜びました。そして、ジャックと原っぱで相撲を取りました。

「ジャック、どこにいたんだい。僕、晩に田舎へ帰るんだ、もうあえないのだぜ。」

知らずに熱い涙が、目の中からわいて出ました。ジャックは、いったことがわかるのか、幸

吉の涙にぬれた顔を舌でぺろぺろとなめています。

遠くで、ほかの犬のなき声がしました。すると、ジャックは、急に幸吉を振り捨て、あちらへ走っていってしまいました。

五

がんこの叔父さんが、たいそう機嫌がよくジャックの頭をなでています。そのそばに紫色の長いたもとの着物をきたみつ子さんが立って、見て笑っていました。あちらで、拍子木の音がすると、年ちゃんや、正ちゃんが、

「紙芝居のおじさんがきたよ。」と、駆け出していきました。

幸吉は、自分もいこうかと思ったとき、ふいにガタンと体が揺れたので、眠りから覚めたのです。彼は、田舎行きの汽車に乗って、夢を見ていたのでした。

昨夜、叔父さんが、荷物を持って、停車場まで送ってくれました。夜が明けると、汽車は、広々とした平野の中を走っていました。車中には、眠そうな顔をした男や女が乗っていました。窓から外を見ると、あたりの田圃や、雑木林は、まだ冬枯れのしたままであって、すこしも春の気分が漂っていなかったのです。山々には、雪が真っ白に光っていました。汽車は、だんだんその山の方に近づいていきました。そして、ある駅へ着いたときに、幸吉は、いままで

乗ってきた汽車と別れて、ほかの客車へ乗り換えなければならなかったのです。これから自分を乗せてゆく汽車は、もうちゃんとあちらで待っていました。形が旧式で色も古びていました。幸吉は、自分がだんだん都から離れてゆくという、さびしい気がしました。

その日の晩方、彼は、故郷の生まれた家へ帰ったのです。そして、幾年ぶりかで、お母さんのそばに床を敷いてもらって寝ることができました。夜中に目をさまして、小便に起きました。

彼は、戸を開けて戸口に出ると、青ざめた星晴れのした空は、忘れていた、なつかしい幼い日の物語をしてくれますので、しばらくその昔語りにききとれて、じっと目をみはっていると、遠くで、

「ウオー、ワン、ワン。」という犬のほえ声がしました。

「ジャックだ！」

幸吉は、こう叫んだものの、ジャックの声が、こんなところまできこえるはずのないことを悟りました。彼は、泣きたいような気持ちがしました。ただ、あのとき、ジャックを助けてやってよかったと独り心の中で満足して、また床へ入って眠りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　1977（昭和52）年9月10日
　1983（昭和58）年1月19日第5刷
底本の親本：「未明童話　お話の木」竹村書房
　1938（昭和13）年4月
初出：「お話の木」
　1937（昭和12）年5月
※表題は底本では、「花《はな》の咲《さ》く前《まえ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花の咲く前

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/